

カゲロウプロジェクト想像小説。



第1部。メカクシ団ラストブロウ。

第1章。ヘッドフォンアクター。

第1話。『白衣の科学者』たち。

バイス。

バイスは純粋な科学者みたいな少年だ。——そう少年くらいの年齢にしか見えない。

しかし、実際には、この研究所の中でも指折りの天才である。

彼の得意分野は、人造人間の精製である。人造人間と言っても、人間が1から作る人間のことでない。『人が造った人間』というよりは『人が造りたかった人間』というところだろうか。

端的に言えば、性能の意味において、人造人間は人間に勝る——何が勝るのか。

それがESP（超能力）である。

超能力の説明はここでは省くことにしよう。とにかく人造人間は、人間にはない特殊な力を1つ持っているくらいに想っておけばよい。

この精製の際には、『知識の樹』から取れる樹液を純化したものを『のり』みたいなイメージで使い、その人間に他の人間の魂を突っ込んで定着させる。突っ込む魂は、定着が容易なその人間の家族が血の繋がっている人間が多い。——まあ、いくら超能力が使えるようになるからと言って、この時点で諸手を挙げて人造人間になりたがる人間はいないだろう——家族を殺さないといけないのだから。

だから、大体、『人造人間』にされる人間とその家族はセットで拉致されることも多い。

『終末実験』はバカデカイ計画なので、1000人もの人造人間を用意する必要があり——つまり、それがバイスにとっての至福の時間なのだった。

実は『知識の樹』の純化アンプルだけで、超能力は充分に呼び覚ますことも出来るのだが、そうすると『個人の能力』が発揮され、どうしてもそれは弱い力になりやすい。しかし、ここに他人の魂を突っ込んでやると、能力覚醒時の際、その身体の中で『主導権争い』が行われ、魂が少し混じり合ったり、結果的にその身体の『魂の総量』が大きくなる結果にもなるので、その個体はより良い能力を持って生まれてくるのだ。

バイスは、人造人間に魂を突っ込んでからの『悲哀』が大好きだった。——とっても彼好みだった。

バイスは勿論、純粋な科学者であるから、自身を『人造人間』にしようとは露ほども想わないので、これは想像だが、1つの人間の身体には、1つの魂で充分なのだ。ここに他の魂を入れ込むのである。当然窮屈だ、それこそ死にたいくらいに苦しいに違いない。バイスはその時に魂がビクビクと震え、必死に新しく入ってくる魂に抗うのを見るのが楽しくて仕方なかった。それを特殊な透過レンズを張った顕微鏡を使って覗くのが、彼の人生で1番楽しい時間だったのだ。

そんな彼だから、1000人もの人造人間精製を頼まれた時はもう天にも昇る気分だったが——数よりも質、という言葉もある。

バイスには特に想い入れの深い2体の個体があった。

1つは、最強の自信作、『あの目』である。個体ナンバーは『E B 5 7 5 7』。その個体ナンバーの長さが、その個体の能力の強さを示す。

6つ文字は最高レベルである。

まあ、今ではその名前は廃れて、彼のあまりに鋭くしかも胡乱な目つきから、皆で『あの目』『あの目』と呼んでいるのだけれど。

ちなみにこの名前はトニーというバカが、「それにしても『E B 5 7 5 7』さんのあの目つきは怖えよ……あの目は怖え」としきりに繰り返しているのを聞いて、バイスが研究所に流行らせた。バイス自身も実は、強烈な雰囲気を出す『あの目』のことが苦手で、その意趣返しみたいなものだった。『あの目』当人自体は、しかもそれを気に入ってしまったらしいから更にそれを上回る趣味の悪さだ。意趣返しの意味がない。

そのようにして、研究所内最強の能力を持つ、『あの目』を精製出来たことが1つ。

もう1つは、能力的には底辺の『C』という個体である。一時的な視覚遮断等は、まあ超能力としてみると、かなり弱い部類となってしまう。何せ『運命に干渉し、未来を変えてしまう』としか想えない超能力すらもあるのだから。

だから、彼女の場合は経緯が面白かった。そもそもこんな弱い個体になってしまった原因は、それが延命メインの目的で行われたからなのだ。

コノハという男により、Cは『白衣の科学者』の研究施設にまで運び込まれた。彼は、溺死寸前のCを助け出し、その存命をあらうことか『白衣の科学者』に託したという訳だ——コノハがもし、Cと再会し、彼女がまるで別の種類に造り替えられていることを知ったら、どんな顔をするだろうか？ そして、Cはコノハを、恨むだろうか？ その想像はなかなか楽しい。

そして、コノハにも必要な時に協力するように約束を取り付けてある——とびきりの改造を、彼には施してやろう。そう、ほとんど人間では——元の彼ではなくなってしまうく

らしいヤツを。

それがバイスには楽しみでならない。

トニー。

白衣の科学者の使い走りに当たるトニーという青年と少年の間くらい金髪男はバカだった。

優れた知識や技能なんて持ち合わせちゃいない。しかし、質の悪いことに、彼なりの『悲劇嗜好』というか、いかにも小物臭漂うある趣味があった。

それは、抵抗できない弱者を翳るというものだった。

トニーは月光差し込む鉄格子が並ぶ一角で、陽気にも聞こえるような口調で話しかけた。——相手はライムグリーンの髪をデタラメに結んだ、快活そうな女の子だった。そう、牢屋に閉じ込められても、彼女はその元気そうな印象を失っていなかった。その名を『C』という。『人造人間』の最底辺。

「——とうとう明日は、『終末実験』だぜ、おい」

「何てこと……！ 止めてよ、トニー！ いい加減にして！」

「いい加減にして？ お前は口の聞き方を分かっちゃいないな……。」

俺に止められる訳ないだろ？」

「小物だもんね……」

おいおいおい、とトニーは想う。これじゃ、どっちが上だか分かりやしねえじゃねえか。

「お前のその偽物の正義感みたいな奴は、きっとコノハの受け売りでしかねえんだろ… …？ 透けて見えるぜ」

だから、彼は主導権を取り戻す為に、そんな悪意のある笑いを滲ませた。

「だからどうしたっていうの？！」

だけど、とにーは見ている。その勢いが、いささか減じているところを……。だから、彼はトドメを刺した。

「……『終末実験』は俺の考えも及ばないような、ヤバい計画だ。どっちにしろ、1000人規模で、『人造人間』が殺される。

なあ？ 想わないか？ コノハが『改造』されるとしたら、絶ッッ好の機会だと、そう想わねえかよ？」

以前から、コノハの『人造人間化』についてはCに仄めかしていた。Cの呼吸は、途端にあえぐような、苦しげなそれになった。

「そんな……そんな……」

「そうだな。俺にもお前にも『それ』を止めることはできねえよ」

意趣返しをするようにして、しゃがみ込み、俯くCの姿を目に焼き付けて、トニーは背を翻した。

「コノハ……あなただけは……」

泣きそうな弱々しそうな声を上げるCの独房の隣で、達観したような緑髪のツインテールの少女が、ただ何も言わずに月を見ていた。

ツインテールの少女は想う。

(……いよいよ明日だ。

『彼女』の運命を変えて——私は死ぬんだ)

エヴァンス。

『白衣の科学者』の中堅である、神父エヴァンスはため息を吐いていた。

彼はその役職に関わらず、使い走りのようなことをさせられることが多かった。

『白衣の科学者』には珍しい、肉弾戦特化、研究所防衛にも力を発揮する、身体性を拡張したタイプの科学者だ。

そして、ある程度の高位の立ち位置と更には単純に『移動速度が速い』というふざけた理由から、この研究施設でも指折りの科学者から、メッセージマン的なことを頼まれることが最近多い。『白衣の科学者』には案外アナログなところがあって、最も重要な情報や火急の用事等は、電子的メッセージではなく、人による伝達を好むところがある。「自分の趣味に私を付き合わせるな……」それがエヴァンスのため息の理由である。

「おい、バイス！ ヘッドノックが呼びだぞ！」

「……あ？ ちょっと待て、今、手が放せない……ヘッドノックが何の用なんだ？」

科学者間では基本的には敬称は略される。立場の高低はあれど、どこから優れたアイデアが出るかは分からないからだ。基本的には、どんな発想が出来るかが、『白衣の科学者』の立場を決める。悪意の『スケール感』による順列と言ったところだろうか……。

「ヘッドノックに言っておいてくれ。アンタのせいで今、忙しいんだってな……。集中させてくれなきゃ、終わるものも終わんないぞ？」

『人造人間』の最終チェック、後、配備指定だろ？ 全くハードワークだ……」

「だけど、その指令を下したヘッドノック直々の呼び出しなんだぞ？」

「面倒くさいなー！ ああもう！」

年相応の駄々をこねるフリをして、いかにも気怠そうな空気を発散させて、バイスは部屋からのそのそ出てきた。一応指示に従うつもりはあるらしい。

ヘッドノックの部屋についてみると、その配線のカオスのようにになっている部屋の中央、まるで王座みたいな高い位置にある椅子に、ヘッドノックは腰掛けていた。

異様な威圧感。

何を言われている訳でもないし、そうする決まりがある訳でもない。

しかし、自然と、バイスとエヴァンスは強いられるように片膝立ちの低姿勢を取っていた。

「それで？ 僕にどんな用なんですか、ヘッドノック……」

「そのことだが。」

1日、『終末実験』を早める」

まるで、『決定事項』みたいに語られる端的な1言。しかしその内容は「ああはいそうですか」と看過出来るものでは決してなかった。

バイスは「はあああ？！」と喚きたい気持ちを必死に抑えて、平静を装った。

「何故……ですか？ そして、それだと『人造人間』の配備も終わんないって、当然分からないアンタじゃないだろ？」

「知識が充分でない私ですら、それは無謀に感じますが……」

口々に言う、バイスとエヴァンス。それに応えるヘッドノックは軽口を叩くかのようだ。——しかし、その表情はまったく動いていないのだが。

「なあ、バイス。明日の『終末実験』ではたくさんの『人造人間』が生命を落とすことに

なるな？」

だから、明後日だつての……という言葉を読み込んで、バイスは応える。

「まあ、そうですね……」

「だとしたら、お前も死ぬ気で取り組むのが生命の礼儀というものではないか？」

その言葉はバイスとエヴァンスには悪趣味な冗談にしか聞こえなかった。内容的にも悲劇的な嗜好のある『白衣の科学者』のトップの発言とは思えない。

「……ちょ、ちょっと待ってください。私からも、その『理由』を伺ってもよろしいですか？　つまり、その『1日終末実験を早める』理由ですが」

「それは……それはなあ……」

ヘッドノックは笑っているように見える。いや、言葉の雰囲気は愉しげなのだ。しかし、表情は1ミリも動かない。それがまるで蠟人形のような不気味さを発揮していた。

「——楽しみだからだ。お前らは想わなかったか……？　例えば、楽しみにしている行事があったとして……1日でもその日が早く来てくれないかと願う……そんな想いだよ」

バイスもエヴァンスも、流石に黙り込んだ。『終末実験』は、建前はあれど、その中から見出される『成功個体』を求める計画であつたはずだった。

「私は、1日でも早く、あの『都市』が壊れる音が聞きたくて聞きたくて聞きたくて、仕方がないんだよ……それでこれが指示書だ」

それを見せられて、バイスは二の句が告げなくなる。作業の徹底的な効率化——確かにこの通りにやれば……バイスが感じていた『不可能』はもはや『不可能』でなくなる——。

何より、エヴァンスも、バイスも、言葉がなかった。『目的』など関係ない、自らの愉悦を最優先するその心情。あまりにもえげつない——狂気。

ヘッドノックのそれに当てられて、何も言えなくなった2人は——

「……………」

「——分かりました」

沈黙と応答で、それに応えるしかなかったのだ。

第2話。エネと実験のはじまり。

彼女の日常は、もうあまりにも彼女自身に馴染んでいて、もうそれは当たり前で、だから疑問に想うこともない。

小学校、中学校、高校、大学、大企業が2つと、まるで測ったかのように最低限の『社会構造』が演出されていることも、誰1人として、『家族』の顔を思い出せないことも。

——だって、この『街』では、1人暮らししている高校生なんてたくさんいるし。

エネは何1つ疑問に想わない——想えない。

ということで。

8月と言えば花の女子高生には、全国的に、いや全世界的に夏休みっ！

ってな訳でエネも誰に邪魔されることもなく、自堕落な生活を楽しんでいた。

「宿題終わった？」

「勿論手を付けてない」

そんなチャットを交わすのはあのもう3ケタを越えるバージョンを数えた国民的狩猟ゲームの画面。

お相手はクラスメイトのマグだ。エネには親しい女友達にユノという娘がいるが、彼女は文学少女でこういう荒っぽいゲームは好まない。

エネは今、飛竜の首を切り落としながら、古びたラジオをBGMとしていた。借りた家の元の宿主の置き土産で、戸棚の上に放置されていたのでたまに気まぐれで付ける。

エネは何となく『耳寂しい』女の子で、何となくゲームをしている時も、テレビを付けっぱなしにしたりラジオを付けっぱなしにしたりする。——今日はラジオ。

丁度、クエストクリアをしたところで、ゲーム画面が静かになり、エネは伸びをしつつ、ふとラジオの音声に意識を向けた。

その時、タイミングを測ったように、ノイズが走り、政府の緊急入電が入る。

「米国大統領によると、米国内の秘匿の兵器施設がハッキングにより完全にコントロールを奪われ、今、予断を許さない状況が続いているとのことですよ！」

米国大統領の声（英語）。

『もう……おしまいだ……おしまいだ……。』

我々は最悪の兵器をテロリストに明け渡した。もう全世界に照準されている……。

かの兵器は最高の抑止力であり、最悪の人類滅亡装置だ……。

あ、あと1時間で、地球は……。

——滅ぶ』

ニュースキャスターと解説、ゲストの会話。

「入電は30分前、つまり、この『1時間後』というのは、もう『30分後』ということですね?!」

「何故このような情報がストップされていたのか……政府関係者による暴動への配慮から……」

「そんな場合じゃないだろ! もう地球は……おしまいなんだ……!」

何だこれは? 陰謀論? そんなのは猫にでも食わせてしまえ、とエネは思った。

地球が終わる……あはは、そんなバカな……アホなことが……ある訳が……。

エネは現実逃避するように、ゲーム画面を覗いた。

そこには無情に1言だけ、メッセージが表示されていた。

『接続はタイムアウトしました』。

エネは、ありとあらゆる方法で、マグに、ユノに、連絡を試みようとしたが、それらはすべて失敗した。

正体不明の焦燥が、現実をジリジリと圧迫する最中、気の抜けるような、『ピンポンパンポン』というあの連絡の前の音が鳴った。

「この都市には、有効なシェルターがありません。住民の皆さんは、都市外に避難するように……。

お急ぎください。

あと『30分』もございません」

まるで、煽るみたいなアナウンスに、外の喧騒がうるさくなる。

そして、着信するはずのない、電波が1本も立ってない携帯がメールを着信した。件名も本文もなし。アドレスには『shirohata』が入っており、まるで『白旗を上げて降参しろよ』と言われているようでイラッとした。

謎の添付ファイルをほとんど手の動くままに開く。

音声ファイル……？

「やあ、こんにちは♪ いい『終末』をお過ごしかな？」

エネはそのままディスプレイを握り潰しそうになった。

「良い訳ないでしょ……！ 何なの、これは」

「おお、怒らないでくださいな。私は『案内人』です」

「『案内人』……？」

「私の声に聞き覚えはありませんか？」

「っていうか、これどうなってんの？！ 音声ファイルのはずじゃ……」

「音声ファイルに偽装しているだけで実際には電話しているのと同じですよ……」

澄ましたような相手の声には聞き覚えがある。しかし、どうにも違和感が拭えない……。

「あなたの声って、マグがカラオケでふざけて録音した……私の声に……似てる」

「……ふう。最低限の冷静さは持っていたか。第1段階はクリアだね……」

「さっきの道化じみた口調はやめたの？」

「私も、命令には逆らえない身でね。ずっとあの口調のままでいかないといけないとしたら、なかなか死にたい気分になったことでしょうね」

「そりゃあ良かったわね……それで？ 『案内人』さん？ 私に何か用？」

「君は、都市からの脱出方法を知っている？」

瞬間、思考が空白になった気がした。

「——分から、ない、……え、なんで——」

「という訳で、私が『案内人』という訳だ。さあ、エネ、君を『終末の向こう側』に、案内しよう。

まあ、付いてこれるかは君次第だけど」

「何で名前知ってるの、っていう質問は、もうしてる暇もなさそうね——」

「あと、『25分』でこの世界も終わりだからね」

『案内人』の言葉に従うのは癪だったけど、しかし、今はそれしかない気がした。

——これは勘だけれど。

雨が降る前に、何か嫌な予感して家に駆け込んだりとか、テストの選択問題で良さそうなものを選ぶと正当してしまう時の感覚と、これは、似ている。

まあ、それが私の『能力』だからね——。一瞬浮かんだその発想を、エネは次の瞬間には忘却している。

——そして走り出した。

すべてを置き去りにして。

第3部アンコール。メカクシ団のウエディング。

第216話。『親和度』の暴走。

大草原の真ん中、トガをひとしきり泣かせた後、『メカクシ団』はおひらきという感じになった。

トガは取りあえず、「1人にしてくれ」ということで、まああれだけ泣きじゃくった後で、もう隠すものがこれ以上あるのかという感じだったけれども、まず第1の事情として、今のトガのシステム構築ではモニタの前を一瞬でも離れると、この世界の運営が成り立たなくなってしまう、とのことだった。皆の元にたまには遊びに行けるようにシステムを再構築する、とのこと。——それには時間が掛かる。

「宇宙で起きるありとあらゆることは再現可能だったんじゃないか？」

キドがちょっと冗談みたいに言うと、

「可能だ！　だが、一瞬でできるとは言ってない……特にシステム周りは煩雑にし過ぎた……それにちょっと弄らないとまた影が湧き出したり、記憶が消えたり、自動でリセットが掛かりループに再突入するかもしれないんだぞ……！」

トガの口調は拗ねた風ではあったけれども、キドとしてもその可能性はゾッとしなかったし、とにかく放っておいてやることにした。だけどその前に、

「ちょっと皆も聞いといてくれ！　お前に少し調整をお願いしたい。何ていうのか……この世界で死ぬのは困る。それに10000年も現実に帰れないんだったら年を取るのもし具合かもしれない。だが、過去の記憶を取り戻してから、何もかもが思い通りに実現しちゃったりとか、特にこの色味だ……薄過ぎる世界はどうにも違和感があるんだよ。そこは調整をしてもらえないか？」

「なるほどな。色合いに関しては皆が本部に帰るまでに変えておくよ。要するに情報量を下げて、管理を容易くしていただけたし——それにまあ本来の魂の色は現実ほど濃くはないから、あれが本来に近いんだよ。現実と差異を求めることで、お前らが真実に気付くかどうかの判断にも役立、……」

キドに睨まれてトガはちょっと黙った。

「もう俺たちは対等だろう……？　そんな管理めいたことはもうしないでくれよ」

「しないって……どっちにしろ、お前らがもう来て、真実をすべて知ったんだ。設定は大幅に調整するよ。

変更点もちゃんと俺が出向いて伝えるからさ」

立場はもう対等というよりも、キドの方が上であるような気さえしてくる。指示する上司とそれに報告する部下。

トガは神だったがキドは団長だった——言ってみればまあそういうことだ。

「あ。ところで後者のことなんだが、それはお前ら次第だ」

「その言い方もやめろよ」

「細かいと嫌われますよ……団長」

「うるさいなあ……」

頭を掻きながらキドは言ったが、ちょっとだけ以前の空気感を演じたトガに少し嬉しそうだった。

「俺たちの問題ってことだ。つまり、この世界を何でもありのトガとメドゥーサの世界として生きるのか、現実風の制約と重みのある世界として生きるのか、その選択すらもこの世界は許容するだろう。だから……」

「まあ、個々人の判断、あるいは無意識的選択が自動的に反映されるってことか……じゃあまあそれぞれに任せる、としか言えないな。」

アホらしいが10000年もあるんだろ？ 俺は管理しようとは思わないよ。今この瞬間から無礼講にしよう。

俺のことも、団長と想わなくて結構だ」

その瞬間に、レベッカがキドの後ろから抱き着いてきて、

「ねえねえ、キド、私って言うてみてください〜」

マリーが悪戯げに笑った。

「ちょ、ちょっと離してって……キャ、」

上げられた悲鳴に対し、「どうでもいいけど、団長ってたまに見せる女の子的な部分が凄いかわいいですね」と、団員の誰かがつい言ってしまった言葉に皆がうんうんと頷く。

「え？ 何、何なのこの空気……私、いや俺は……い、いやさっきのは撤回する！ や、やめてくれ……」

ちょっと涙目なキドはその後もみくちゃにされながら本部へと運ばれていった。

「何か嵐みたいなもんだったな……」

トガとしては少しいい気味と想わない部分もなかったけれど、まあ、作業をしよう作業。あとで遊びに行く為にも今は仕事。

「……あ？」

モニタコンソールに振り返ってみると、キドの勢いに圧される形で、タッチスクリーンの一部に肘を付いてしまっていたことに気が付いた。

『親和度』。この世界に住む、『メカクシ団』を主とした人間の感情出力を高める、まあいわば空間の雰囲気を変えるアロマみたいなパラメーターが最大になっていた。

「うーん。まあいいか。仲良きことは良きことに決まってる」

人間として生きることに疎くなっていたトガは、そのパラメータを放置したまま、他の作業、キドの言っていた色の調整に入った。——まあとにかく現実を再現してみればいいんだろう？

仲がいいほど喧嘩するとは良く言ったもので、相手に対する配慮というのは親しいとちよっとは弱くなるもんだろう。

団長だったキドがあそこまで弄られたのも、皆の遠慮が消え去ってしまっていたからだ。

この世界では、一体どんなことが起きていくのだろうか？ 神であるトガはそれを放置した———というか忘却していたので、もうここからはそれを観察する人間も管理する人間もない。

ひたすらに遠慮と配慮と余裕を失った役者だけが舞台となるこの世界を駆け回る。

……多分そういうことになるだろう。

はい。はじまりはじまり。

第217話。コノハとCの激情。

キド弄りも一段落して（というか、キドももうぐったりして、今はカノにずだ袋みたいにズルズルと引きずられているので）、もう皆の興味も移り、それぞれの話に花を咲かせていた。

その光景を見ると、とても『メカクシ団』の団長には見えず、混乱してしまいそうだったけれど、まあ『親和度』がぶっ壊れた世界というのはこういうことなのだ。肩書きは何の役割も果たさない。

結局、人間的にはか弱い乙女なところもあったキドは、この機会に鬱憤晴らしにあった

とも言えるが、まあキドに不満を持っていた人間はいなかったもので、ただ単に彼女を女の子扱いしてからかいたかったとそういうことなんだろう。

その内、段々と世界の彩度も上がってきて、世界は色合いを色濃く取り戻しつつあった。人間っていうのは視覚的情報に強く囚われる傾向がある。『メカクシ団』も例外ではなく、彼らは世界に現実的な厚みが加わったかのように錯覚した——現実には見かけ上変わったのみで、逆にトガによりほぼ暴走状態になっている世界に、まあこの時団員は1人も気付くことはなかったというワケだ。つまり、キド弄りも大団円を終えた後の物語の高揚感をもたらしたものの、くらいに皆、片付けていたのである。自分自身が、そういった感情の暴走で振り回されるだなんてことは、流石に予想の外であった。

——そして、実際にはおかしくなっていた世界観の余波が、帰っているその間にじわじわと防波堤に水を増していき、そして、『メカクシ団本部』に到着すると同時に決壊した。

誰もが予想できなかったことだけれど、いきなり、突然、唐突に、

そして、衆人環視のまっただなかで——コノハが土下座した。

「C……君の殺して……ごめん！ 私は……もう君にどう詫びたらいいか……！ もう死んだ方がいいかな？！ こんなダメな大人は……死んだ方が世のためだろう？！

さあ……私を殺してくれ……C！！！」

全力で普段は落ち着きのある彼らしくないそんな台詞が滝のようにコノハの口から溢れる。

Cからも流石にいつもの「コノハ大好き！」的な雰囲気は抑えられている。——流石に彼女も好きだった人に殺されたことはショックだったみたいだ、と『メカクシ団』の皆が想っていると、Cも突然動いた。

Cはコノハの頭と首を引っ掴み、強引に立ち上がらせ、少し逆に持ち上げるくらいにすると落ちる勢いを軽く利用して、コノハの唇を強く塞いだ。しかも完全にディープだった。舌が入っていた。どちらかと言えばコノハの方が「ふむう、うあうえ？！」的な感じでしどろもどろになっていた。

Cは唇を離すと、

「コノハさん！ ——いえ、コノハ！！！ もし私に生命を預けてくれるというなら、私の為に使ってください！ ずっとずっとずっと好きでした……！ 言えなくて、苦しくて、どうしようもなく切なかったんだよ？！

でも、私はコノハのことが男性として好き！ とっても好き！！ 愛してるの！！！」

殺されたって……それは凄い苦しかったし、暗闇なことだけど……でも別にそれはコノハさんのせいじゃない……。

いいえ！ もしコノハさんが私を自分の意志で殺したとしたって、私は許すわ！

だから……コノハさんも、私に殺してくれなんて、悲しいことを言わないでください！
私の為に生きてください……！」

台詞は激情的で、そしてドラマティックだった。『メカクシ団』の面々は、どちらかといえば朗らかで怒りを見せないCの激情に飲まれた。そこはさながら、演劇の舞台上。そこに強引に引き上げられ、ただ困惑ようにもしていたコノハは、やがて涙を流しながら、

「それが私の人生なら……嬉しく想うよ」

ただ、そっとそう答えた。

「もう、泣き虫なんだから！」

そう言って、Cはコノハの手を引き、どこかに行ってしまった。

そしてその場には、呆然とした『メカクシ団』だけが残された。